

# 日本語のしくみ (4)

## —— 日本語構造伝達文法 V ——

原自動詞		ak- (開く)					
		連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	
推 定	前文献時1	ak-i	ak-u	ak-u	ak-ë	ak-i=a	
	前文献時2	ak-ay-i				ak-ay-i=a	
	前文献時3	ak;ë-Ø	ak;Ø-u	ak;ur-u	ak;ur-e	ak;ë-yö	
	前文献時4						
以下，文献記録時代							
3 語 幹	奈良時代	ak;ë-Ø	ak;Ø-u	ak;ur-u	ak;ur-e	ak;ë-yö	下 一 段 活 用
	平安時代						
2 語 幹	鎌倉時代	ak;ur-u	ak;ur-u	ak;ur-u	ak;ur-e	ak;ë-yö	
	室町時代						
1 語 幹	江戸・前期	ak;e-Ø	ak;e-ru	ak;e-ru	(なし)	ak;e-ro	下 一 活
	江戸・後期						
	現代	ak;e-Ø	ak;e-ru	ak;e-ru	(なし)	ak;e-ro	

# 日本語のしくみ (4)

## －日本語構造伝達文法 V－

		原自動詞	ak- (開く)				
			連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
推 定	前文献時1	ak-i	ak-u	ak-u	ak-ë	ak-i=a	
	前文献時2	ak-ay-i				ak-ay-i=a	
	前文献時3	ak;ë-∅	ak;∅-u	ak;ur-u	ak;ur-e	ak;ë-yö	
	前文献時4						
以下, 文献記録時代							
3 語 幹	奈良時代	ak;ë-∅	ak;∅-u	ak;ur-u	ak;ur-e	ak;ë-yö ak;e-yo	下 二 段 活 用
	平安時代	ak;e-∅					
	鎌倉時代						
2 語 幹	室町時代		ak;ur-u				
	江戸・前期						
1 語 幹	江戸・後期					ak;e-ro	下 一 活
	現代	ak;e-∅	ak;e-ru	ak;e-ru	(なし)		

今 泉 喜 一



## まえがき

### 説明文法 ー 遠い未来の人のための

「日本語構造伝達文法」は日本語の諸現象を説明しようとする「説明文法」です。

これは、日本独特の惰性的で安易な「ひらがな文法（国語文法）」(p.92) になじんだ現代人のための文法ではありません。言語学を基礎に置く、未来人のための文法です。ただし、自然科学と異なり、権威主義・保守性の強い国語研究の世界のことなので、公教育で日本語の文法教育を変えることはまずできないでしょうから、未来人といっても遠い未来の人のことです。しかし、研究段階では現代人にも期待しています。

この『日本語のしくみ』シリーズはその説明文法の入門書的な位置付けにあります。

### 本書では3つのことを扱う

本書では「テ形音便」(V1章)、「古語の時相ー過去を中心にー」(V2章)、「動詞の態拡張」(V3章)の3つの事項を取り上げます。いずれも日本語を歴史的に捉えます。これらを行うのは、現代日本語の現象を説明するためには、日本語の歴史的な推移について明らかにしておく必要があると考えるからです。

#### V1章 テ形音便

「見てください」と言うときの「見て」の形を動詞の「テ形」といいます。「テ形」とはいつでも、「読んでください」のような「で」の形になることもあります。

「立つ」「取る」「買う」は「って」の形になり、

「死ぬ」「読む」「飛ぶ」は「んで」の形になり、

「書く」は「いて」の形に、（「行く」は「って」の形に）

「こぐ」は「いで」の形に、

「貸す」は「して」の形になります。

国語学ではこの現象があることはくり返し述べていますが、なぜそうなるのかについては、論理的説明をしていません。「音便」というのだから「発音しやすくしている」のだろうと考えられます。しかし、「発音しやすい」とはどういうことなのでしょう。

本書では、この「発音しやすい」ということは、「口の中で、もともと2回ある接触を、1回に減らしているから発音しやすくなっているのだ」と述べています。この音便化の原則については『日本語構造伝達文法・発展A』のA3章で論じています。

本書の説明はA3章に基づいていますが、簡潔にしすぎているかもしれません。A3章にも当たっていただければ幸いです。なお、本書では口腔図を加えています。

#### V2章 古語の時相ー過去を中心にー

本書では、古語の時相を、過去を中心に扱っています。

古語の時相表現では、「き」が時(テンス)を、「つ、ぬ、たり、り」が相(アスペクト)を表していると考えられます。また、それらが結合した、「けり(き+あり)」や、「て

き」, 「にき」, 「てけり」, 「にけり」もあります。

このような古語の過去表現の多くは、現代語では「た」が担うようになっています。その関連も示しました。

これらは、『日本語構造伝達文法・発展C』のC9章に基づいて述べています。

なお、古語には相対時の表現はありません。現代語の「た」が生まれて相対時が生まれたようです。相対時の発生についての研究は今後の課題です。

### V3章 動詞の態拡張

生活の単純だった大昔は、動詞の数は少なくてよかったです。生活がだんだん複雑になると、きめ細かな動詞表現が必要になってきました。そこで、日本語では、-as- や、-ar-, -ur-, -e- などの「態」を付加して新たな動詞を生み出し、動詞の数を増やしてきました。(例: kudak-u → kudak;e-ru)

-as- 原因態

-ar- 受影態

-ur- 許容態 (江戸時代後期に -e- に統合)

-e- 許容態

文献による言語記録が始まった奈良時代は動詞を増やすのが一段落した時代でした。

このV3章では「動詞の態拡張」を扱っていますが、「態拡張」というのは、動詞に上述の「態」を付けて、動詞の数を増やすことを意味しています。この章は『日本語態構造の研究—日本語構造伝達文法 発展B—』の内容に基づいています。

なお、理解の助けとして、「時代のものさし」を使用しています。縦と横のものがあります。(本書p.46 参照)

**縦のものさし**(右図→)には、「前文献時代」がありますが、この時代には文献による言語記録がありませんので、のちの文献記録時代の状況からさかのぼって推測するだけです。実証はできません。1~4の番号も相対的なものです。

**横のものさし**(下図↓)は文献記録時代だけのものです。鎌倉時代に武家政権となり、動詞(語幹)で合理化が進みました。江戸・後期に言語文化が江戸中心となり、動詞(語幹)のさらなる合理化(統一)が進みました。

#### 縦のものさし

前文献時1
前文献時2
前文献時3
前文献時4
以下、文献記録時代
奈良時代
平安時代
鎌倉時代
室町時代
江戸・前期
江戸・後期

#### 横のものさし

8c	9c	10c	11c	12c	13c	14c	15c	16c	17c	18c	19c	20c	21c
奈良	平安			鎌倉		室町		江戸			現代		

## 練習問題

多くのページの下部にある問題に答えてみてください。その章節で扱われている事項について理解を深めることができるものと思います。念のため解答例も示してありますので参考にしてください。

## 参照箇所

各節の先頭ページなどの右肩に、参照箇所が示してあります。参照箇所には本書より詳しい記述がなされていることもありますので、参照いただければ幸いです。その参照箇所を示す記号については次をご覧ください。

## 参照箇所を表示する記号

「日本語構造伝達文法」にはすでに8冊の本があります。その8冊の中の特定の章節を参照する必要があるときは、次のような記号を使って表示します。

- ① 『日本語構造伝達文法』の中の章節…『文法』3.1 あるいは単に 3.1 / 3章
- ② 『日本語構造伝達文法 発展A』の中の章節… A 3.1 のように「A」が付きます。
- ③ 『日本語構造伝達文法 発展B』の中の章節… B 3.1 のように「B」が付きます。
- ④ 『日本語構造伝達文法 発展C』の中の章節… C 3.1 のように「C」が付きます。
- ⑤ 『日本語構造伝達文法 発展D』の中の章節… D 3.1 のように「D」が付きます。

## 入門書

- ⑥ 『日本語のしくみ (1) -日本語構造伝達文法 S-』の章節…「S」が付きます。
  - ⑦ 『日本語のしくみ (2) -日本語構造伝達文法 T-』の章節…「T」が付きます。
  - ⑧ 『日本語のしくみ (3) -日本語構造伝達文法 U-』の章節…「U」が付きます。
- 本書『日本語のしくみ (4) -日本語構造伝達文法 V-』の章節…「V」が付きます。

## ホームページ

「日本語構造伝達文法」はホームページでも情報発信を行っています。このサイトは簡単に「ニコデブ」(日本語構造伝達文法の略)で検索することができます。

<http://www012.upp.so-net.ne.jp/nikodebu/>

このサイトでは『日本語構造伝達文法』、『日本語構造伝達文法 発展A』が読めるようになっているほか、「不思議ノート」があり、また、授業教材の形でかなりの部分がPDFとパワーポイント(アニメーション活用)で掲載してあります。

## 研究会

小さな研究会ですが、JR八王子駅近くで月1回開いています。研究会の日時、場所等の案内はホームページにあります。関心のある方はお気軽にご参加ください。

2019年3月 今泉喜一

# 目次

まえがき i

目次 iv

日本語構造伝達文法の歌・3 viii

作詞・作曲うら話 x

## V1章 テ形音便 ..... 1

### V1.1 テ形音便とは何か (2)

テ形音便形 (2)

音便はいつ、なぜ発生したか (3)

テ形音便の構造図示 (3)

### V1.2 2回の接触を1回に……4方式 (4)

テ形音便形はなぜ発音しやすいのか (4)

同化, 口音と鼻音 (4)

#### [1] -i を省略する方式 (5)

① t 末動詞 tat- 立つ (5)

② r 末動詞 tor- 取る (6)

③ w 末動詞 ka(w)- 買う (6)

#### [2] -i を省略し, t を d にする方式 (8)

④ n 末動詞 sin- 死ぬ (8)

⑤ m 末動詞 yom- 読む (8)

⑥ b 末動詞 tob- 飛ぶ (9)

#### [3] -i を発音する方式 (10)

⑦ k 末動詞 kak- 書く (10)

⑦の特例 行く yuk-, ik- (10)

⑧ g 末動詞 kog- こぐ (11)

#### [4] 音便化しないようにみえる方式 (12)

⑨ s 末動詞 kas- 貸す (12)

### V1.3 母音末動詞が音便化しない理由 (13)

### V1.4 テ形音便の方式一覧 (14)

### V1.5 テ形の関わる音便化 (15)

(1)「完了基 た」 (2)「たら(ば)」 (3)「たり」

### V1.6 音便化しない t (16)

### V1.7 音便は4種類・3様式 (17)

### V1.8 イマス音便 (18)

### V1.9 連濁 有声性の順行同化 (20)

V2章 古語の時相—過去を中心に—…………… 21

V2.1 時相と確率 (22)

V2.2 古語の時相 (24)

[1] 相に重点がある形式 (24)

(1a) 完了を示す「つ」と「ぬ」……前指向の「つ」と、後指向の「ぬ」 (25)

(1b) 完了の結果状態を示す「り」と「たり」……「り」はならない (26)

「基幹」 (27)

(1c) 現代語の「た」 (28)

(1d) 「つ」「ぬ」「り」「たり」の活用 (29)

[2] 時に重点がある形式 (30)

「き」 (30)

[3] 時相連合 ……時と相を組み合わせて表現する形式 (31)

(3a) 「てき」と「にき」の異同 (31)

(3b) 「けり」は「き・あり」から (32)

(3c) 「てけり」と「にけり」の異同 (33)

V2.3 現代語の「た」へ (34)

V3章 動詞の態拡張 …………… 37

V3.1 態拡張を考えるために (38)

[1] 基本的な態の構造 (38)

「態」とは (38)

許容態 -e- (38)

原因態 -as- (39)

受影態 -ar- (39)

[2] 許容態誕生 (40)

元来の許容態詞 -(a)y- (40)

許容態 -ë-, -i- の誕生 (40)

[3] 許容態の3つの形 (41)

(1) -e- (-i-)

(2) -ur-

(3) -∅-

[4] 本文法での各活用形 (42)

[5] 活用形の比較 (43)

[6] 態の語幹化 (44)

[7] 古語の活用表 (45)

[8] 時代のものさし (46)

### V3.2 態拡張 12 方式 (47)

許容態の語幹化と形の統一 (48)

12 方式とは (50)

態を表す形態素 (50)

12 方式を例とともに (51)

#### 12 方式の[1] 無変化 (52)

Z 1 [自の自] 原自動詞に何も付かず, そのまま現代語の自動詞に (52)

T 1 [他の他] 原他動詞に何も付かず, そのまま現代語の他動詞に (53)

#### 12 方式の[2] -e (許容態, -ur-や-Ø-の形も)で自他逆転 (54)

Z 2 [自 e 他] 原自動詞に許容態詞 e が付いて他動詞に (54)

T 2 [他 e 自] 原他動詞に許容態詞 e が付いて自動詞に (55)

#### 12 方式の[3] -e / -i (許容態, -ur-や-Ø-の形も)で自他補強 (56)

Z 3e [自 e 自] 原自動詞が許容態詞 e に補強され, 自動詞のまま (56)

T 3e [他 e 他] 原他動詞が許容態詞 e に補強され, 他動詞のまま (57)

Z 3i [自 i 自] 原自動詞が許容態詞 i に補強され, 自動詞のまま (58)

T 3i [他 i 他] 原他動詞が許容態詞 i に補強され, 他動詞のまま (59)

#### 12 方式の[4] 受影態 -ar- で新自動詞を作る (60)

Z 4 [自 ar 自] 原自動詞が受影態詞 ar により新たな自動詞に (60)

T 4 [他 ar 自] 原他動詞が受影態詞 ar により新たな自動詞に (61)

#### 12 方式の[5] 受影基 -ar-e- により新自動詞を作る (62)

Z 5 [自 are 自] 原自動詞が are により新たな自動詞に (62)

T 5 [他 are 自] 原他動詞が are により新たな自動詞に (63)

#### 12 方式の[6] 原因態 -as- により新他動詞を作る (64)

Z 6 [自 as 他] 原自動詞が as により新たな他動詞に (64)

T 6 [他 as 他] 原他動詞が as により新たな他動詞に (65)

#### 12 方式の[7] 原因基 -as-e- により新他動詞を作る (66)

Z 7 [自 ase 他] 原自動詞が ase により新たな他動詞に (66)

T 7 [他 ase 他] 原他動詞が ase により新たな他動詞に (67)

#### 12 方式の[8] 原因基 -s-e- により新他動詞を作る (68)

Z 8 [自 se 他] 原自動詞が se により他動詞に (68)

T 8 [他 se 他] 原他動詞が se により新他動詞に (69)

#### 12 方式の[9] 原因態 -as- により敬語動詞や非敬語動詞を作る (70)

Z 9 [自 as 自] 原自動詞が as により敬語自動詞に (70)

T 9 [他 as 他] 原他動詞が as により敬語他動詞や非敬語他動詞に (71)

#### 12 方式の[10] 原因基 -as-e- により敬語動詞を作る (72)

Z 10 [自 ase 自] 原自動詞が ase により敬語自動詞に (72)

T 10 [他 ase 他] 原他動詞が ase により敬語他動詞に (73)

- 12 方式の[11] 原因基 -ay-e- により新自動詞を作る (74)  
 Z 11 [自 aye 自] 原自動詞が aye により新自動詞に (74)  
 T 11 [他 aye 自] 原他動詞が aye により新自動詞に (75)
- 12 方式の[12] o 格以外の客体を主体化して新動詞を作る (76)  
 Z 12 [自○自/他] 原自動詞がある態構造により新動詞に (76)  
 T 12 [他○他/自] 原他動詞がある態構造により新動詞に (77)

V3.3 不規則にみえる動詞 (84)

する (84) 来る (85) 死ぬ (86) ある (87)

V3.4 いくつかの動詞 (88)

食べる (88) 触れる (89) 聞こえる・見える (90)  
 林氏が見える=おいでになる (91)

質問の解答例 ..... 97

- V1章 (98)  
 V2章 (102)  
 V3章 (105)

あとがき (117)

本書を読んで答えられるようになったこと (118)

コラム目次

- コラムV1 形態素に分けられない……国語学の限界 (36)  
 コラムV2 動詞(語幹)が2段階で統一 (78)  
 コラムV3 係り結び  
 ……待望の新終止形は倒置がきっかけで誕生 (80)  
 コラムV4 許容態の語幹化と形の統一 (82)  
 コラムV5 かな「語幹」が恥ずかしそう (92)  
 コラムV6 未然形? 仮定形? (93)  
 コラムV7 原因基 -(s)as;e- (94)  
 コラムV8 受影基 -(r)ar;e- (95)  
 コラムV9 古い原因基 しむ<sup>レ</sup> -(a)sim;Ø- (96)

日本語構造伝達文法の歌・3

作詞・作曲 今泉喜一  
助言 澁谷郁代

Dm A7 Dm Dm A7

つきやほしが おしえてくれる しぜんをつらぬく  
 コーヒーをおき おもいめぐらす でんたつぶんぼう  
 てねんのしき うつろうすがた たしやーとかかわる

Dm Gm Dm A7 Dm

ちからのり しゅか くについて きーいてみる むかいくるかぜ に  
 じそうのず かこしんこう中 よーんじゅうに ふたけた表示ほ う  
 ひとのさま あすあるえと くみあわせで あらわすいかん けい

Dm A7 Dm

だいいちだいに だいさんの ことなるしゅかく しゅごがある  
 ささーのふねが ながれゆく まえやうしるに このはぶね  
 げんいんたいと じゅえいたい きようーたいと たいのきで

Gm Dm A7 Dm Dm A7

しゅたいぞくせい せつてい順の せんーごかんけい x3times  
 ぜったいじーと そうたいじを そなえたにほんご  
 じしょうをとらえ いあわす にほんごのしくみ にほんごぶ んぽ

Dm

う

- 1 月や星が教えてくれる 自然を貫く力の理  
主格について聞いてみる 向かい来る風に  
第1, 第2, 第3の異なる主格, 主語がある  
主体, 属性, 設定順の 先後関係
  
- 2 コーヒーを置き 思いめぐらす 伝達文法 時相の図  
過去進行中 42 2桁表示法  
笹の舟が流れ行く 前や後ろに木の葉舟  
絶対時と相対時を 備えた日本語
  
- 3 天然の四季 移ろう姿 他者と関わる人のさま  
あすas, あるar, えe と組合せで 表す態関係  
原因態と受影態, 許容態と態の基で  
事象を捉え, 言い表す 日本語のしくみ

日本語文法

## 作詞・作曲うら話

「日本語構造伝達文法の歌・3」を作ることができました。今回は文法の主要な内容を3つ選んで織り込んでみました。「主格」(1番)、「時相」(2番)、「態」(3番)です。

[1番] 「主格」について知りたいとき、誰に聞けばよいでしょう。国語学者ですか、(アメリカの)言語学者ですか。とんでもない。自然の中にある論理性に聞けばよいのです。すると、主格には、主体と属性の設定順の違いで、3種類あることを教えてください(S1.3 参照)。哲学者のカントは天体の運行と同じ性質の法則が人間の心の中にあるという趣旨のことを考えていました。

[2番] 時間を川の流れにたとえ、事象を笹舟(主文事象)にたとえると、時相関係が2桁数で簡単に示せるようになります。また、日本語は基準点を発話時点とする「絶対時」のほか、笹舟の事象生起時点を基準点として木の葉舟(従属文事象)を捉える「相対時」を生みだしました(S1.16 参照, T1.4 参照)。

[3番] 日本語では、「あの雲が雨を降らす hur-as-u」や、「重要な情報を盗まれる numsum-ar-e-ru」、「英語が話せる hanas-e-ru」のように、自然や人間などに生じる事象を「態」で捉えて表現します(S3.1 参照)。

私の通う歌謡教室では、練習する曲に2種類あります。「自由曲」と「課題曲」です。2018年の5月に「自由曲」として「**美しき天然**」を練習したいと思いました。今は亡き母が昔歌っていた歌です。「チンドン屋」と聞いてすぐ分かる世代なら、誰でも知っている、「空にさえずる鳥の声～」の曲です。イメージがチンドン屋と結びついています。

**カラオケ(DAM)の曲**を聞いて、驚きました。**なんと9分もあります**。ふつうのカラオケの曲なら4分前後です。4番まであります。私は半分の2番までで十分だと思い、恐る恐る澁谷先生に相談してみました。すると、先生は、全部歌うのが良い、と指示されました。……結果として、全部で良かったと思います。この曲は全体を通じて造物主の尊いわざを讃えるものだったのです。明治時代に日本で初めて作られたワルツの曲だそうですが、それがこのような堂々とした崇高な内容のものであったことを知りました。別にチンドン屋のための曲ではなかったのです。

**カラオケの最後の部分**は30秒近くも伴奏だけで盛り上がり過ぎて終わります。この部分は歌い手は黙っていればよいのですが、それではつまらないと思い、少し「アーアー」と声を出しました。先生は専門家の立場からそれを後押ししてくださいました。勇気づけられ、私は声をつないで出すことにしました。それで良かったと思います。

**素人の私ひとり**で練習したら、9分もかけて全体を歌うこと、最後を声をつないで締めくくることが、そのほかのここに書ききれないことなど、そんな大胆なことはしなかったと思います。歌曲の世界を熟知した**専門家の先生による指導**のたまものです。

ひるがえって、現在は定年退職しましたが、**日本語文法の専門家をひそかに自任する私**は、どうあるだろうか、どうあればよいのだろうか、と自問した次第です。